地域情報（県別）

【千葉】赤字を理由に閉院した病院の患者の受け皿として独立開業-古垣斉拡・フルガキ・メディカルグループ理事長に聞く◆Vol.1

5クリニックで約6500人の患者を診療

2023年9月29日 (金)配信 m3.com地域版

千葉県と東京都に合わせて5つのクリニックを持つ医療法人社団ケア・ユニティ、フルガキ・メディカルグループ（医療法人社団ケア・ユニティ他）。糖尿病とその合併症の管理に力を入れており、糖尿病と心臓病の専門医を配置することで、ワンストップでのサービス提供を行っている。複数の地域にまたがって開院をした経緯、掲げている理念、地域との医療連携、合併症の管理のために実施している取り組みについて同グループ理事長の古垣斉拡氏に聞いた。（2023年8月28日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）

古垣斉拡氏

――独立から、複数の地域でクリニックを開業するまでのグループのあゆみについてお聞かせください。

大学を卒業後に鹿児島県で離島医療を経験した後、2007年に千葉県立東金病院に赴任しました。その東金病院は長年、巨額の赤字を抱えており、新たな設備投資ができないことから、老朽化を理由に2014年3月に閉院することになりました。同年の4月から地域医療の新たな受け皿として、東千葉メディカルセンターが開設されることが決まりました。

しかし、開設時は糖尿病専門医が不在であり、東金病院にかかっていたインスリン患者約700人を含む、約2500人の糖尿病の患者さんが満足に治療を受けることができないことになります。いずれは故郷の鹿児島県に戻るつもりでしたが、これを機に、2013年6月に東金病院からほど近い場所に、ふるがき糖尿病内科医院を開院しました。開業後半年間で約1100人の患者さん（そのうちインスリン患者が約300人）が東金病院から移ってこられて、病院閉院に伴う患者さんの不安を少しは解消できたのではないかと考えます。

来院する患者さんが増えたことから、2015年には東金市の隣にある大網白里市に、ふるがき糖尿病循環器クリニックを開院。そして、2016年に東金市のとうがね中央糖尿病腎クリニック、2018年に東京都大田区にあるかまた内科

糖尿病クリニック、2023年に千葉県山武市のさんむ内科・糖尿病クリニックを継承しました。さんむ内科・糖尿病クリニックは千葉県の医師会からの紹介ですが、かまた内科糖尿病クリニックは縁あって継承しました。

思い起こせば、千葉県の分院の院長を募集した際に、東京都大田区蒲田にあるクリニックの院長からの応募がありました。聞けば雇われ院長で、赤字を理由に転職を希望したとのことでした。そこで私はその院長とオーナーにクリニックの事業買収を提案し、継承したという経緯があります。なお、このかまた内科糖尿病クリニックも現在は黒字転換しています。この5つのクリニックで、2022年度時点、糖尿病以外の患者さんも含め累計で約6500人の患者さんを診療しています。

――フルガキ・メディカルグループの理念についてお聞かせください。

経営をする上で大切にしているのが、3つの理念です。1つ目は地域医療・経済に永続的に貢献するということです。東金病院の閉院は私にとって人生を変えるほどの大きな出来事でした。また多くのスタッフや医師が雇い止めや異動になり、約2500人の患者さんは不本意ながら転院を余儀なくされました。　医療機関は厳しい情勢のなかでも利益を出して、老朽化やIT化のために設備投資を行い、人材確保のためにさまざまな費用を捻出する必要があります。多くの公的な医療機関とは違い、民間の医療機関では赤字が累積したら、まずは銀行の融資が止まり、最悪のところ倒産や閉院もあり得ます。東金病院での厳しくつらい経験をしたことから、当グループでは、利益を出しながら地域医療を守ることを理念として掲げています。

しかし、いきなり永続性を築くのは非常に難しい。永続性を成立させるために、2つ目の理念として提唱するのが、四方良しの精神です。患者、従業員、法人、関係業者が利益を得ることで、経済的・精神的に豊かになるということです。企業はさまざまな関係者のおかげで成り立っています。こういった人たちを大切にしなければ永続的に地域医療に貢献することが困難です。

そして3つ目の理念が、徳を積むということ。社会や企業に対してというよりは、どちらかというと個人向けの話です。医療提供というのは、そもそも人が人にサービスをすることです。ですから、できればいい人に診てもらいたいですよね。癒やされに行ったのに、嫌な気分になって帰るということを、患者さんは望まないでしょう。そうさせないために、私たちはいい人間であるように努め、特に周囲といい関係づくりをすることを心掛けています。

また、医療機関における退職率の全国平均は14%であり（毎年7人に1人が退職しています）、退職の原因の多くは人間関係からくるものです。特に千葉県山武郡市は全国的も医師不足、医療スタッフ不足の地域であり、将来的にも人材の採用と育成が厳しいことが予想されます。そのために当グループ全体で人に関することに焦点を当てています。まずは個人が、徳を積む。そして個人が成長すれば、組織全体が成長し、四方良しの精神につながります。そうすれば、結果的に地域医療・経済への永続的な貢献を実現できるでしょう。

――地域における役割と、他の医療施設との連携についてお聞かせください。

日本全国、特に地方は開業医の高齢化が深刻な問題になっています。2020年のデータによると、開業医の平均年齢が60.2歳で、千葉県もまた、この数字と近い状況でしょう。継承してくれる医師がいればいいのですが、赤字で人材が不足していたり、後継者が見つからなかったりで、特に地方では継承が難しいのですよね。1つのクリニックを1人の医師だけで経営していると、その医師の負担が大きくなり、万一その医師が辞めたり、身に何かが起こったりすると、閉院せざるを得ない状況にもなりうるでしょう。閉院すると、患者さんが困るだけでなく、スタッフも職を失うことになります。それは絶対に避けたいので、当グループでは全ての診療所で2～3人の医師で診療にあたっています。30代から40代の若い医師が中心で、現状では年齢を理由に後任を探す心配はありません。まずは組織として盤石な体制を築くことが、地域医療に貢献するためには大切だと考えます。

他の医療機関との連携も積極的に行っています。先日、東千葉メディカルセンターの声掛けて、地域の医療機関が集まり、地域連携に関する会議を行いました。そこで、糖尿病専門医が不在の、ある病院とつながることができ、当グループと協力し合うことになりました。当グループのクリニックは、規模としては小さいかもしれません。しかし、規模にかかわらず連携して、地域医療をカバーすることが、超高齢社会において今後ますます重要になると考えています。

地域連携をするにも、顔が見えないとなかなか連携が取りづらいですよね。そして、病院もクリニックも、同じ地域にいながら意外と互いの情報を持っていません。中には表には出ていない情報もありますので、直接会うことがますます重要になる。そこで今、当院では病院の地域連携室への営業を進めています。A4の紙1枚に当院のグループの

施設、機能、営業時間などをまとめ、周知を行っています。この1枚があれば当院の顔が見え、連絡をしてもらいやすくなると考えています。

――心臓病の専門医を配置したきっかけと、メリットを教えてください。

心臓カテーテル手術で有名な心臓外科医の先生に週に一度来ていただいています。その先生は閉院した東金病院に勤めていた方で、私が開業することを耳にしたらしく、当院での診察を申し出てくださいました。以来10年間、ずっと診療を手伝ってくださっています。

この地域は心臓病を診られる医師が少ないのですね。東千葉メディアルセンターには3人の専門医がいますが、いつでもすぐに診てもらえるとは限りません。ですから、この先生に来ていただけるおかげで、地域において一気通貫で糖尿病とその関連の医療を提供できています。

――糖尿病以外に、内科、甲状腺、睡眠時無呼吸症候群など他の病気を診ているのも、糖尿病との関係からでしょうか。

心臓病もそうですが、睡眠時無呼吸症候群、甲状腺関連の病気は糖尿病との親和性が高い。こういった病気をワンストップで診ることで、患者さんを包括的に診ることができるだけでなく、通院負担の軽減にもつながると考えています。

そして、糖尿病だけ診るというのは、特に医師不足のある地方においては、あまり現実的ではありません。開業医の高齢化が進み、地域のクリニックが減るでしょう。今年の春にはそのような閉院したクリニックから患者さんがグループ内のクリニックに流入することもありました。それを考え、2本目の柱として一般内科も掲げています。コロナ禍においては、かまた内科糖尿病クリニックを除く全てのクリニックで発熱外来を設けました。糖尿病にこだわらず、地域のニーズになるべく応えていくつもりです。

◆古垣 斉拡（ふるがき・なりひろ）氏

2001年鹿児島大学医学部卒業。初期研修後、2003年から奄美大島にある奄美中央病院と南大島診療所で離島医療を経験。2007年より千葉県立東金病院での勤務を経て、2013年6月にふるがき糖尿病内科医院を開院。2015年11月にふるがき糖尿病循環器クリニックを開院。2016年3月にとうがね中央糖尿病腎クリニック、2018年4月にかまた内科糖尿病クリニック、2023年にさんむ内科・糖尿病クリニックを継承。2023年9月には鹿児島県にある親族が経営する飲食店グループを継承。日本内科学会総合内科専門医、日本内科学会認定医。

【取材・文＝増田洋子（写真は古垣氏提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索